

そのまま十月二十日出発し、十一月八日ナホトカに着いたが船が来ないので浜辺に八日間も船待して十一月十一日にようよう復員することが出来、生家に着いた。家族達もどうにか引揚げていた。十一月三十日小雪の降る日であった。

その後体調も悪く通院し回復を待って北海道に渡ったもので土建業の帳場として勤めたが不景気のため二十九年に退職して赤平の役所に勤め生活の道をたてて六十歳の停年まで二十年七か月勤めて退職して更に土建会社に再就職、今は余生を送っている。

南洋から引揚げて

福島県 菅原 タケ子

私は、昭和十六年、親と共にパラオ島の清水村に行き、秋には、結婚してコロウルの町に行った。主人の妹一人と長女と五人家族になり、主人は島隊という部隊につとめていた。その頃、戦争は日々激しくなり、食する物が

不足になってきた。あらゆる物が配給になり、内地からの輸送がとれた。そのとき、コロウルの町は空襲となり、疎開が始まった。私は清水村の親もとに疎開した。食する物はほとんどなく、農業をしていた親の作物も盗難にあい、さつまいもの汁や木の芯が主食で、それさえも食するに足りず、ヘビやカエルまで皆が食べるようになった。栄養失調で死亡する者は日々多く、高い山は餓死した人が埋められ、畑のうねのように言葉には言いあらわせないほどだった。戦争はなんと悲惨なことだろう。

清水村は、毎日B29の襲撃で防空壕生活が続き、サイパンが玉砕になり、まもなく東京が空襲されて、清水村の人達も驚き、日本が負けたという気持ちだった。海のほうは、アメリカの軍艦が囲み、光が町のようにピカピカと艦砲射撃になると皆が考えていた。ある日、さつまいもの植えつけをしていたら、飛行機はピラを清水村にまき、そのピラをおそるおそる拾ってみたら、マンガの絵で、日本が負けたことがかいてあり、戦争が終わったことを知った。

私は、負けたくやしい気持ちより、戦いのおわりであることが良かったと思った。何日かが過ぎ、広島が原爆で爆撃され、終戦になったことは人に聞いてわかった。あと十五日も戦争をやっていたら清水村の人達は全滅していたと思う。

昭和二十年の暮れ、引揚げの通知がきた。引揚げ時は、リュックサックひとつにお金千円までだった。着のみ、着のままアメリカの船に乗りこみ、一週間の船旅で浦賀に上陸した。兵隊の宿舎に入れられて、内地は物不足と物価高に驚き、今後のことを思うと途方にくれた。伯父を頼りに福島にきても食べる物はなく、海の水で塩を焼いて生活をしたが、家族の食物の確保のために開拓を申しこみ、農業生活が始まった。あらゆることが手作業で重労働の生活が長く続き、主人も身体をこわした。主人の出稼ぎは十年におよんだ。この間私は、幼い子ども三人を相手に農業作業は一人でやって、やっと梨を一町四反植えつけ、成功し、生活が安定してきた頃、昭和五十四年春、主人は亡くなった。

子ども達は巣立ってゆき、主人がなくなってから梨を

切ってしまった。私は今隠居生活でひとり暮らしをしている。過ぐる四十五年を振りかえったいま、よくぞここまで生きなからえたと思ひ、胸が熱く、涙が流れる思いである。二度と戦争を起こさぬよう祈る次第である。